５　應援團Circle

（１）活動の目的

飯南高校應援團Circleは「学校地域を盛り上げる」ことを目標に活動を行っている。地域の大人たちと積極的に関わり、高校生が地域のために出来ることを自主的に考えながら、自分たちができる地域課題解決を行っている。

まず１学期は、学校を盛り上げるための活動に注力する。そして、夏休みから２学期以降に地域へ飛び出した活動へと繋げていく。その中で、地域を知り郷土愛を育みながら地域課題を自分ごとと捉え、主体的に考える姿勢をみにつける追究力、課題解決をするために大人や学生と深く関わりながら共に活動する対話力や創造力、地域の良さや自分たちの活動を効果的に多くの人に知ってもらうための発信力の育成を目的としている。これらの力を伸ばし、生徒それぞれの自走力を身につけることをねらいとしている。

野球応援時の様子

OB による応援指導

（２）内容

活動を振り返り、整理を行いながら言語化を行う。そして、地域みらい留学での取組紹介や高校生入門講座などの体験入学時に、学んだ事や活動中で得た気づきや変化について発表する。その経験をもとに、活動してきた空き家片付けプロジェクトの更なる発展や、新たな機会へとチャレンジしていく。自分たちの興味・関心をベースに、校内や校外の方の協力を得ながら「私ができること、私だからできること」を探究する。すべての活動において、校内外の方と繋がることを目指す。

入門講座での取組発表

花火募金活動

①すべての活動において工夫した点・効果的だった点

ア．繋がりを活かした活動

ａ．校内の生徒とともに活動する

ｂ．卒業生と関わる機会を作る（リアル・オンライン）

ｃ．自分たちのやりたいを関係者と対面し言葉で伝える

ｄ．授業と関連づける

ｅ．県内外の他校生と活動する

イ．地域と連携した活動

ａ．地域の方と活動（地元企業・近隣住民の方など）

ｂ．松阪市役所の方と活動（飯南・飯高振興局、地域おこし協力隊など）

ｃ．鈴りん探偵舎からのサポート

ｄ．地域イベントへ積極的に参加

ウ．ＳＮＳを利用した情報発信

ａ．活動内容を随時発信し、関係人口や交流人口を増やす

ｂ．ＳＮＳを通じた交流（Instagram・Facebook）

エ．活動の整理を行う

ａ．地域の方と計画をたて、目標を決める

ｂ．活動内容の言語化を行い発表（マイプロジェクト・入門講座など）

（３）活動１　「空き家片付けプロジェクト・空き家カフェ」

①内容

卒業生である平野彩音さんから引き継いだ空き家片付けプロジェクトを進める中で、自分たちで空き家の再利用をしたいという思いから、空き家カフェ計画を進めている。これは昨年度のマイプロジェクト時に「みんながハッピー！魔法のいいなんいいたかスーパーフード」というテーマで発表したものから繋がっている。

高校生が空き家を片付けたあと、空き家バンクへ登録してもらう流れの発展として、高校生が地域の方の協力を得て、空き家でカフェを開くという内容で進めている。主な協力者としては、卒業生の平野彩音さんや濱上欄樹さん、地域おこし協力隊の高杉亮氏や横山陽子氏である。

空き家相談会

空き家片付け

②成果と課題

卒業生から空き家片付けプロジェクトをはじめたきっかけや思いを聞いたことで、活動目的や意味の理解を深めることができた。そして引き継いだ活動の中に自分たちのやりたいを重ね、これまでの協力者である松阪市役所の方や鈴りん探偵舎と繋がりながらより発展的な活動になっていった。

昨年のマイプロジェクトでの発表時点では絵空事だった内容が、地域おこし協力隊の高杉さんの協力を経て、実現できる具体的な活動になり、課題に向けて取り組む意欲が高まっていった。また空き家カフェをどのように進めるのかについて、いつまでに片付けを済ませるのか、お金がどのように動いているのかを学びながら大人と一緒に計画を立てたことで、活動に向けての責任感が増していった。

しかしコロナの影響で、夏休み中に行うはずであった空き家ミーティングや９～２月にかけて行う空き家片付け、発表の機会などが中止や変更によって計画が進まず、生徒のモチベーションを維持することが困難であった。オンライン活動の難しさを感じた。

（４）活動２　「一億円プロジェクト」

①内容

ＳＢＰ（Social Business Project）という地域の課題をビジネスの手法を用いて解決していこうという取組で繋がった全国の高校生と「明るい未来」をテーマとして、全国の高校生が社会と繋がりながら協働し、自らがその活動するステージを生み出し躍動する『日本を元気にする未来創造プロジェクト！』に参加した。この活動では、それぞれの県に暮らす高校生が県内の企業と協力し、県のＰＲを目的とした商品選びや製作を行い、青森県を舞台に行われるイベントで商品販売をする。８月に予定されていたイベントはコロナ第５波の影響で中止となった。

三重県のＰＲ商品については相可高校・南伊勢高校と考案していくこととなり、３校それぞれが考えた商品を詰め合わせることとなった。本校生徒は県内に本社がある全国的にも有名な亀山ローソク株式会社の東京支店kameyama candle house.と協働し、【愛しかないキャンドル】を製作。５色のローソクは三重の特産品にちなんだものとした。

みらいの大人プロジェクト
中沢氏によるギフト完成報告

kameyama candle house.菊島氏

愛しかないキャンドル

②成果と課題

昨年度参加した第５回全国高校生ＳＢＰ交流フェアでの繋がりを活かした取組をしたことで、県内外の高校生や大人と発展的な活動ができた。また生徒がＳＮＳを通じてkameyama candle house.と連絡をとり、商品を製作したことや、その商品をＰＲするために松阪市長や飯南地域振興局を訪問したことで行動力が成長していった。

青森でのイベントがコロナで中止になるなど最終的な活動まで繋げることができなかった。そこで活動を止めるのではなく、自分たちに何かできることがないのかという発想まで繋げることがこれからの課題である。またオンライン交流だけでなく、リアルの交流の必要性を感じる機会となった。

（５）活動３　「第４回全国高等学校小規模校サミット　～オンライン～」

①内容

10月23日、山形県立小国高等学校をホスト校とし、小規模校23校、総勢191名の全国の高校生が集まり、本校からは６名の生徒が参加した。親睦を深めるとともに、各校地域が抱える課題について意見交換し、将来それぞれの地域で活躍する資質・能力や協働意識を育成する機会を目指して行われた。「今ここで起こっていることは、将来の日本中で起こり得ること、小規模校だからこそできることがきっとある～仲間と一緒に未来を考えよう～」をテーマに、本来なら関わることのなかったであろう同年代の高校生たちが、各地域や自身の将来についての課題を考えた。

小規模校サミットパンフレット

小規模校サミット取組の様子

②成果と課題

サミットに向けて９月末からのオンライン事前研修に計４日間参加し、ファシリテーションのスキルを学んだ。サミット当日では、小国高生全員がそれぞれに役割を主体的に取り組む姿に好影響を受け、本校生徒３名も各班でファシリテーターになるなど積極的に活動した。ＩＣＴを利用して有意義な交流ができた中で、小規模校の生徒たちは地域の大人や地域課題などに直に触れる機会が多い分、地域に大事にされている実感があり、当事者意識が高いと気づく機会となった。

今年で３回目の参加となり、取り組み発表やファシリテーターの役割を担うことができたが、小国高生のように一人ひとりがより責任ある行動がとれるよう、本校

参加生徒の役割分担を明確にする必要性を感じた。準備から運営、打ち合わせや当日の行動までできる限り生徒に任せ、教員側の伴走の仕方を工夫していきたい。

（６）活動４　「花火実行委員」

①内容

コロナ禍でも出来ることをみんなで作りながら、花火を打ち上げ学校地域に元気を届けることをテーマに、飯南高校だからこそ出来る『日本一の文化祭』を目指した。校内で協力者を募り、全学年から31名が集まり活動した。「最後の文化祭で最高の思い出を作るため」、「コロナで暗くなっている今だからこそ、地域を元気にしたい」、「気になるあの子を喜ばせたい」、「地域の子どもたちを笑顔にしたい」などマイテーマを持ち、生徒からＰＴＡへ協力を呼びかけるなど、学校関係者や地域企業、近隣住民の大人の方と花火実施に向けて活動を行った。

花火師の辻さまへお礼

花火実行委員集合写真

②成果と課題

学校地域を巻き込み『日本唯一の打ち上げ花火』を実施できた。生徒が中心となり、校内や学校関係者、地域の大人の協力を得ながら進め、全員で学校や地域を元気にする機会となった。実行委員の生徒は協力依頼のためにＰＴＡ役員会へ出席、企業訪問、小中学校への広報、警察消防への届出、お礼動画製作など自分たちで動き、その中で地域の温かさに改めて触れた。そして自分たちのやりたいことやできることが何かを深く考える機会へと繋がった。その後参加生徒から校内活動や発表会、地域創造サミットなどの地域活動で活躍する生徒が現われ、自走力の向上や本校の掲げる生きる力を伸ばす機会へと繋がっていった。また生徒の思いや行動力をベースに、教員や保護者、地域の方などの大人の間でも協働できたことが大きいと感じる。

花火お礼動画

小規模校サミットでの経験もありリーダーシップを発揮する生徒もいたが、31名を５つの班に分け活動する中で人任せにする生徒も現われたことから、効率よく動くためには、より細分化した役割の工夫が必要である。教員間でしっかりと情報共有した上で、生徒と仕事内容などを一緒に考える時間を作る工夫も必要である。

（７）その他の主な活動

①校内　運動部壮行会、第103回全国高等学校野球選手権三重大会　など

②校外　日本の“未来”について語る会、マイプロジェクト「マイテーマ発掘」
連携中文化祭写真展、産業教育フェア、Onedayカフェ「はぜの風」　など

Ⅸ　2021 高校生地域創造サミット（県事業）

１　目的

高校生が地方創生や地域活性化の重要性について理解し、地域のことを主体的に考え行動する意欲や地域とともに課題解決に取り組む姿勢を身につける機会とする。松阪市飯南・飯高地域の課題について、フィールドワークや他地域の高校生とのディスカッション等により多様な考えに触れながら、高校生ならではの発想による「地域を生かした」解決策を検討する体験をとおして、松阪市に提言する活動を行う。そのような活動をとおして、将来社会に貢献しようとする態度を育むとともに、高校を核とした地域活性化に取り組むきっかけとなるようにする。

２　内容

（１）日程、テーマ、場所等

本来は昨年度に飯南・飯高地域で開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響で順延し、12 月 26 日（日）、27 日（月）の２日間で行われた。初日にはフィールドワーク班に分かれて飯南・飯高地域へのフィールドワークを実施し、帰着後は各討議班に分かれての還流報告やテーマ設定に向けての討議を行った。２日目も各班でポスターセッションに向けて討議を行い、ポスターセッション後に松阪市への提言をとりまとめていった。

今回のサミット全体のテーマは「地域の資源や特色を生かした活性化をめざすなかで、自分の感じる『豊かさ』を実現するためには」であり、フィールドワークは単なる仕事体験ではなく、地域で生活する方々はどのように生活し豊かさがあるのかを見つけていった。今回のフィールドワーク先は８カ所で、その場所は以下の通りである。

Ａコース：亀成園　　Ｂコース：高尾畜産
Ｃコース：ＮＰＯ法人ｉ sierra（アイシエラ）　　Ｄコース：深緑茶房
Ｅコース：かじ安大徳・マルハ林業　　Ｆコース：めぐみ
Ｇコース：叶林業合名会社　　Ｈコース：もくいち・マルゴ株式会社

この行事は三重県教育委員会の主催であるが、そのフィールドワーク先の選定には飯南・飯高両地域振興局の尽力が大きく、そして本校のコンソーシアムに所属する企業･団体や本気の大人講演会、部活動等でも協働している方々に関わっていただいた。

（２）本校生徒による事前準備

開催地域にある学校として８名が参加し、フィールドワークに入る前に全体の場で地域の紹介を任された。そのため、参加者の多数を占める應援團 Circle とその顧問を中心として、両地域振興局局長と参加生徒との協議を重ねていった。そこでは局長たちとこの地域の課題を確認しながら、「高校生が主体的に考え行動する意欲が持てるように」、「このサミットに参加した後にも何かしら繋がりが持てるように」といった目標を念頭に置いて、飯南高校だからこそできることを意識した発表を計画した。また今年度も代表生徒に１名が任命され、司会進行の打ち合わせを教育委員会と行った。

（３）１日目の様子

地域の紹介については参加生徒８名全員が自らの想いを伝え、自分たちがこれまで取り組んできた活動も紹介した。途中、卒業生の平野彩音さんも登場し、飯南・飯高地域では高校生や卒業生が地域と協働して主体的に活動している様子を示した。

フィールドワークは各生徒が各場所へ分かれての活動となった。すでに各場所との関係性ができているため、本校生徒はその場所の紹介をしたり積極的に関わっていっ

たりと主体的な活動がみられた。活動後、討議班に分かれると３年生３名、１年生１名が班長に立候補し、これまでの様々な経験で培ったリーダーシップを発揮して討議を引っ張る様子もあった。

夜の討議では、各班ともに地域で「ないもの」や「課題解決」に視点が向いてしまい、序盤は対話がうまく進まない苦しい展開だった。アドバイザーの三重大学西村訓弘教授から「行ってみて感じ取った感覚が大切で、共通項が豊かさになるのかもしれない」、「感じたことを自慢しあうといいのかもしれない」とアドバイスがあり、ようやく各班で少しずつ前向きな視点で対話が始まっていった。

（４）２日目の様子

前日から引き続いてポスターセッションに向けた討議が行われた。全体発表までの時間が限られることから各班は活動が積極的になり、他班との情報交換の時間では、身を乗り出して活発に意見を聴く姿が見られた。ポスターセッションでは、今回見学した各フィールドワーク先を繋げて林業のサイクルを構築しブランドを創っていくプラン、地域ごとに体験コースを作成して観光客を招く方策、空き家を活用した短期移住の促進など、各班がフィールドワーク先で感じ取った良さを活かした発表を行った。全体発表後、各班の内容を代表生徒が集約して「手にある輝きを見つめて磨き高めよう ～つなぎ、広げる、地域の輪～」と提言にとりまとめ、竹上真人市長に手渡した。

３　検証

今回は開催地域ということもあり、生徒は大きなイベントの事前準備から運営に携わる貴重な経験ができた。そして、飯南飯高両地域振興局長との対話やフィールドワーク先への連絡などを通して、より地域を身近に感じ、地域を学び場とした活動を展開することもできた。その過程で自らの考えをまとめ、活動してきた想いを伝える力を一層向上させることができたと感じる。また、初対面の同年齢の高校生と新たな価値を創り出す経験は、今後探究的な学びを進めていく上で意義深いものになった。生徒の活動を見ていると、これまで経験を積み重ねてきた生徒たちは環境が変わっても主体的に活動していたことから、生徒にこのような場を作って経験させる、あるいは場に出すことが必要であると感じられた。

サミット全体を通して、「課題解決」というワードが前面に出ることがあった。「地域課題解決型キャリア教育モデル構築事業」としてのイベントのため一定仕方の無い部分はあるが、それが故に生徒がマイナスからのスタートに陥ってしまった。教員としても「課題解決」に視点を置いて取り組んでしまうことがあるが、ないから何とかしようではなく、「あるものを伸ばす」、「より良くしていこう」という視点が大切であることを改めて学ぶこととなった。そして、自己の在り方生き方を深く考えるきっかけになるような場づくりのために、ワークショップの設計や自分軸で考えることができる運営が必要であると感じた。

Ⅹ　各種データ

１　地域協働カリキュラム推進委員会報告

（１）委員会設置の趣旨

本委員会は校長、教頭、本事業研究担当、教務主任、進路指導主事、各学年キャリア教育担当、各系列代表、カリキュラム開発等専門家、地域協働学習実施支援員で構成し、本事業の運営方法や指導案等を検討する。そして、対話力・追究力・創造力・発信力を見に付けていける地域課題解決型キャリア教育のカリキュラム開発、評価、改善提案を行っていく。

＜本年度の委員会構成：15 名＞

土方 清裕（校長）、田辺 小百合（教頭）、
多賀 秀徳（本事業研究担当 兼 教務主任）、杉野 直樹（１学年キャリア教育担当）、
坂元 利孝（２学年キャリア教育担当 兼 郷土・環境系列代表）、
中村 裕介（３学年キャリア教育担当）、岡 美幸（介護福祉系列代表）、
川上 淳（総合進学系列代表）、中谷 麻紀（コンピュータ系列代表）、
栗谷 英樹（進路指導主事）、
横山 陽子、高杉 亮、飯島 宏枝（以上、地域協働学習実施支援員）、
江森 真矢子、浅野 吉英（以上、カリキュラム開発等専門家）

（２）活動報告（報告事項は除く）・・・今年度は全てオンライン開催

①第１回委員会（４月９日）

まず校長より、方針は本委員会、細部を詰めるのは作業部会といった各会のあり方や、本委員会は定期開催をすることが確認された。そして、今後国事業が終了しても考え方を活かして教育を行っていくこと、今年度実施したものが完成形ではなく試行錯誤しながら取組を続けていくことを改めて共有された。

そして各学年からの年間計画について協議し、「産業社会と人間」のフィールドワーク、「キャリアデザイン」のプレいいなんゼミの各日程が決定した。プレいいなんゼミは、次年度いいなんゼミへと繋がる活動のため例年１，２月に実施しているが、前年度３学期のかけ算プロジェクトとの繋がりと今年度３学期の日程が少ないことから、４，５月での実施に変更となった。このプレいいなんゼミを踏まえて生徒に課題を考える視点を持たせられれば、２年生の系列授業や体験が当初から意味のあるものになるのではという意見が出た。また、いいなんゼミにおいて例年以上に生徒個々に応じた伴走者を繋げていこうという意見もあり、校外の人材を共有できるスペースの必要性についても話し合われた。

②第２回委員会（５月 14 日）

６月２日に実施するフィールドワークの内容について協議した。今後テーマをどのように作っていくのかという部分が大切なため、地域に出ながら自分ごと化して

いく視点や、問いを立てていく視点が大切であると意見があった。そして調べ学習による目的の設定は重要ではあるものの、行ってみて感じる部分も大切にしていってほしいという補足もあった。また、大人も一緒に発見を楽しんでもらいたいという視点も出た。

「キャリアデザイン」のプレいいなんゼミでは、テーマ設定をどのように進めていくのがよいかという議題が出た。５Ｗ１Ｈを活用したものの手応えがなく、やはり教員や生徒との対話で深まっていくものではないかという意見があった。これまでも教員へいいなんゼミのテーマについて質問にいくシステムはあったが、生徒同士で対話させたり、作文で言語化させたりすることも効果的ではないかという案が出た。そして生徒の考えを丁寧に聴き取る必要性について改めて共有した。また、新学校設定科目「地域探究」の内容について提案があり、授業が核となって地域と接続できると魅力的で、本校ではすでにうまく回っていく仕組みがあるという意見が出た。

③第３回委員会（６月 14 日）・・・オンライン開催

第１回フィールドワークの反省があり、生徒が自分たちなりに楽しいものに出会え、多様な形で魅力マップが仕上がったという意見があった。事前学習で Chromebook を活用したため、ワークシートに振り返りをしやすかったという発見もあった。

「キャリアデザイン」の７，８月のインターンシップについては、昨年度からの動きもあり、今年度は新たに受け入れてもらえる企業も含めて 10 社程度が見込めるのではないかと共有があった。進学希望者はオープンキャンパスを中心とし、就職希望者は希望先を聞いて振り分ける方向だが、プレいいなんゼミが前半に入ったため事前学習の時間が例年のように取れないのが課題と意見があった。

④第４回委員会（７月 16 日）

各学年発表会の振り返りを共有した。１学年はキャンパスインターンシップ発表会が初の発表であったが、体験を通じて感じたことを自分の言葉を用いて伝えていたことが印象的だという意見があった。その雰囲気は、なかまづくりワークショップやフィールドワークでの丁寧な指導の効果ではないかと講評があった。２学年はプレいいなんゼミ発表会があり、この時期もあってか知識不足な点や、データの分析について不十分な部分があったと意見があった。そのため、データをどのように見るのかなど普段の授業でも考える時間を増やす必要があるとの反省があった。また、テーマが見つかり火が付いた生徒の火を消さないように、いいなんゼミまでに繋げておける対応が必要ではないかとの提案もあった。

「いいなんゼミ」では中間発表が行われて、例年より記録をしっかり取りそれを分析した発表が行われたと講評があった。生徒の活動については、授業と連携して講演を実施したり体験させたりしているが、繋いでからの次のステップが難しいという意見があった。また、地域おこし協力隊に伴走してもらっている活動や、地域と繋がった活動の報告もあった。

⑤第５回委員会（９月 22 日）

９月当初から在宅学習期間となり、行事予定や計画を変更する必要性を共有した。今後の行事予定を踏まえると事前学習の時間が取りづらくはなるが、第２回フィールドワークを 10 月下旬として､今年度は仲間づくりを中心として新しいメンバー、場所で実施したいと提案があった。昨年度は事前に生徒が行くところを想定してアポイントを取っていたため、生徒が行く可能性のあるところへ教員がある程度事前確認をしておくと良いとの意見があった。

「キャリアデザイン」のインターンシップは８月末に緊急事態宣言のために学校判断で中止となったため、発表の工夫が必要であると共有された。今年度は視点を持った発表視聴とするため、岡山県立瀬戸高等学校から実践共有いただいた視点が書かれた札を持って発表会を実施するとの意見が出た。また、インターンシップに参加できなかった生徒については、当日発表のグループ司会としてファシリテートを磨いていく方向が確認された。「いいなんゼミ」では、各ゼミで例年以上の地域の方と繋がった活動が共有された。そして今年度のいいなんゼミ発表会については、昨年度のようなオンライン開催や、展示発表の校内実施について意見交換があった。

⑥第６回委員会（11 月５日）

校長から、キャリア教育とは狭義の職業選択ではなく、自己の在り方生き方を考えることが大切で、そのことをフィールドワークの運用においても念頭に置いて欲しいとの再確認があった。それを受けて第２回フィールドワークの成果と課題について共有があり、今年度は何を目的としてフィールドワークをやっているのかと地域の方に聞かれることがあり、事前に活動の趣旨を伝える必要があると意見が出た。そして、生徒の事前学習の時間が少なく行き先の内容が深まっておらず、受け入れる側もバタバタしてしまったという意見もあった。そのため、どのように生徒に自分ごととして考えてもらえるのか、人と出会う仕掛けをもう少し組み込んでいくべきではないか、という部分で協議があった。さらに、フィールドワークが３年目となり、学年任せで運用していくのではなく、最良の形でカリキュラムに落とし込んでいく必要があるとの指摘があった。

「キャリアデザイン」のセルフプロデュース型インターンシップ発表会では、司会をファシリテーター（ＭＣ）として、聞き手は視点を持って実施したことが共有された。ＭＣが場を回し、各視点からの意見が発表者にも出て、例年以上に発表会が盛り上がったうえに、当日の生徒の成長が感じられたとの参加者からの意見があった。視点を持たせた方が、発表会で思考の力を付けることがトレーニングできるのではないかという指摘があった。そしてこの運用方法が今後実用化できるかどうかの課題が出た。

「いいなんゼミ」については、在宅学習期間もあって２学期以降でモチベーションに差が付いてしまったという意見があった。報告書については、昨年度から多少の変更はあるが、生徒の思考の流れが見えるものにとの指摘があった。また展示と発表会については、学校での展示、オンライン配信にすることが決定された。

⑦第７回委員会（12 月 14 日）

各学年からの反省と３学期の進め方について協議した。フィールドワークについては、１学期と２学期が連動していけるもの、地域主体ではなく生徒の自分軸をもとにした活動になること、事前学習の必要性が改めて共有された。それを受けてプログラムをマニュアル化していくことや、地域の方との対話の時間を持つこと、エゴグラムで自分自身や価値観について考えて他者との比較をする方法もどうかと提案があった。また来年度この事業はないが、本委員会を継続していくこと、作業部会は少人数でブレストの場として機能させ、授業時間内で会議をもって各種計画を練ることが提案された。

⑧第８回委員会（１月 17 日）

「産業社会と人間」ではかけ算プロジェクトを行い、生徒それぞれが調べたものとどこかの地域とを比較して自分なりの答えを探していく活動を行うことが共有された。その中で、かけ算の答えはどのようなものでも正解で何もしないことはいけない、考えるための技法を身に付けていくことが大切との指摘があった。「キャリアデザイン」では来年度のゼミ活動に向けて、「なんでだろうノート」を一人一冊持つことにしたと共有があった。日頃の疑問や気づきを書きためて、それを改めて見たときに何に興味・関心があるのか発見できるのではないか、テーマのタネが見つかるのではないかという意見があった。

また、国事業のこれまでのアンケートデータについて共有があった。外部データより、「地域に出て行くことを通じて話し合える大人がいる」、「地域から大切にされている」、「橋渡しをしてくれる人がいる」等の項目の数値が高く、学年が進んでさらに学習環境が整ってきているとの意見が出た。また、校内アンケートでも生徒自身の力の向上は実感され、現３学年以外の学年においても上昇が見られることを確認した。

⑨第９回委員会（２月 25 日）

「産業社会と人間」、「キャリアデザイン」、「いいなんゼミ」の来年度の暫定日程と内容が提案された。

１学年の「産業社会と人間」では、取り組みが多く、大まかに計画し、担当者の裁量の隙間を作った。「かけ算プロジェクト」は、今年度３学期に自己分析と並行して行うことで、「かけ算」すべき、自分軸を見つけやすくなる意見もあった。「かけ算」の発表会では自分の言葉で語っている印象もあり評価された。

２学年の「キャリアデザイン」は、コロナ禍で時期を移しての実施もあったが、「かけ算」から「プレゼミ」への課題研究の流れの良さは収穫として、次年度も計画された。「ファシリテーション練習」や日々の疑問のメモから研究テーマを掘り起こす取り組み等新しい試みにも期待が高まった。ただ、取り組みが乱立し、取捨選択も必要と意見が出た。

高い評価を得た３学年の「いいなんゼミ」は、生徒の探究が自走できるよう、他校のような教員の関わり方の成功例を蓄積できればとの期待も出た。

２　作業部会報告

（１）作業部会設置の趣旨

地域協働カリキュラム推進委員会メンバーの日程調整が難しく、委員会の毎月開催は厳しいため、「作業部会」を授業時間内に開催することが当初の趣旨であった。今年度は委員会を定期開催することとなり、作業部会は主に「産業社会と人間」、「キャリアデザイン」、「いいなんゼミ」の内容変更について、原案作成をする場として機能する。

（２）活動報告

①第１回作業部会（５月 10 日３，４限）

・第１回フィールドワークについて
　今後の予定や目的の共有、今年度の活動について協議
・「キャリアデザイン」のインターンシップについて
　体験先決定の方法や、決定後の生徒と受入先との打ち合わせについて
・「いいなんゼミ」について
　地域との伴走状況について、今後のゼミの方向性について

②第２回作業部会（９月 14 日５，６限）

・第２回フィールドワークについて
　第１回とメンバーや場所が異なる件について
　次年度以降の自転車を活用した活動について

③第３回作業部会（11 月１日放課後）

・第２回フィールドワークの成果と課題の共有
　事前学習や活動方法について、地域との共有方法について
・セルフインターンシップ発表会の成果と課題の共有
　実習先での課題の設定について、事前学習の必要性について
・いいなんゼミのテーマ設定について

④第４回作業部会（１月 11 日放課後）

・かけ算プロジェクトの指導方法や日程について

⑤第５回作業部会（２月 14 日３，４限）

・来年度「産業社会と人間」の日程・内容について
・来年度「キャリアデザイン」の日程・内容について
・来年度「いいなんゼミ」の日程・内容について
　※それぞれの科目で柱となる活動を確認し、暫定的に日程を調整
・上記３科目の来年度冊子について